

4 地球環境関係データ

■概要

(1) 大阪府域における温室効果ガス排出量の推移

府域における 2013 (平成 25) 年度の温室効果ガス排出量は 5,860 万トンであり、1990 (平成 2) 年度と比べ 1.7%減少し、前年度と比べると 0.1%増加しています。また、2013 年度の二酸化炭素排出量は 5,572 万トンであり、1990 年度と比べ 5.2%増加し、前年度と比べ 0.2%増加しています。

(排出量は、各年度の関西電力の電力排出係数を用いて算定している。)

(2) 大阪府域におけるエネルギー消費量の推移

府域の石油製品の販売量等から算定したエネルギー消費量は、1990 (平成 2) 年度以降は、全体としては増加と減少を繰り返していますが、2012 (平成 24) 年度は 665PJ (PJ=千兆ジュール) であり、1990 年度と比べ 14.4%減少し、前年度と比べても減少しています。

(3) 再生可能エネルギー等の導入実績

府における再生可能エネルギー等の導入実績 (平成 26 年度末時点) は、太陽光発電が 64.5 万 kW であり、前年度と比べ、18.1 万 kW 増加しています。また、コージェネレーション等の分散型電源が 59.5 万 kW、廃棄物発電等が 23.8 万 kW、などとなっています。

(4) 酸性雨 (酸性沈着)

「酸性雨」とは、以前は大気汚染物質である硫黄酸化物や窒素酸化物の影響により、降水の pH が酸性 (pH5.6 以下) を示す雨のこととされてきました。しかし、現在では「酸性雨」は単に降水 (湿性沈着) だけでなく、粒子状物質やガス状物質 (乾性沈着) をあわせた「酸性沈着」として、国境を越えた広域的な問題としてもとらえられています。これらは土壌、樹木、湖沼などの生態系に影響を及ぼすおそれがあるといわれています。

府では全国的な酸性沈着に関する調査に参画するとともに、府内自治体と共同して梅雨期、秋期に調査を実施しています。これまでの調査結果によれば、全国的に平均 pH4.7 前後の酸性雨が降り続けていることが示されており、将来、これらによる影響が顕在化するおそれが考えられ、今後も注意深く監視を続ける必要があります。